

4 ベルクソン紹介 第5回

「精神のエネルギー」を読む その2



三水会 2016年5月
野口幹夫

<承前> 三水会には心霊現象の経験者がたくさんおられた。

三水会で前篇の報告をしたところ皆様から様々なご感想と質問をいただいた。

中でも心霊現象を自分も経験していると発言された方が3名おられたのは予想しないことであった。臨死体験で少年のころ仲間に促されて川に飛び込んだら、深くに沈み込んでもう駄目だと思った一瞬 人生の思い出がパノラマのように頭をよぎった (O氏) 38度の熱をおかして仕事を続けたあげく人事不省となった時、頭から天国に登っていく夢を見た。

(D氏) 昼間の交差点で叔父と出会う話をしたと思ったらそれは現実ではなかったが、その直後に叔父は亡くなっていた。(MS氏) 甥はスプーン曲げができた。大学に入ってやめたので理由を聞いたら「あれをやると大変体力を消耗するから」といっていた。(M氏) などであって、普段はそのようなことは話されないが、聞いて見ると不思議な経験をなさっている方がすぐそばに居られるのだ。

また深いご質問をいただいた。

テレパシーはやがて科学で証明されると思うか? (Z氏)

哲学は、人はどこからきて、何であって、どこへ行くのかにこたえなければならぬ。(O氏)

AI 囲碁が名人に勝った。コンピューターに直観を取り入れたと聞いている。直観とか第六感というものほどのように働くのか。(K氏)

量子の属性が遠く離れた別の量子に、その属性が瞬間的に移動するテレポーテーション現象が観測され確認されている。その伝達は? (M氏)

人間は気を発することができる。受けとめる側の気が必要だ。(Z氏) などである。

これらの質問に対して、今回の調査で答えうる仮説を作り上げることができた。それはこのレポートの終わりにまとめて述べたい。

第5章 ベルグソン亡き後の動向

5-1 「精神のエネルギー」講演についての評論

復習的にベルグソンの「精神のエネルギー」に関する日本人の評論を二つ紹介する。

1-1 小林秀雄の評論 *1

小林秀雄は昭和初期の日本を代表する知識人である。彼はベルグソンを深く学んだ。彼は全集を読んだ哲学者はベルグソンだけであったといい、いつの日にかベルグソンについて書きたかったが、「無学を乗り越えられなかった」のでついには書かなかったとも言っている。そんな小林が、よりによってこの「精神のエネルギー」を取り上げて詳しく紹介した講演がある。昭和50年に行った「信じることと知ること」だ。

「私が大学に入った頃、ベルグソンの念力に関する文章を読んで心を動かされたことがある。1913年ベルグソンがロンドンの心霊学協会に呼ばれて行った講演で、その大体のところは今でもよく覚えているので、これからお話する。」という前置きで講演は始まった。

「ベルグソンが或る大きな会議に出席していた時、たまたま話が精神感応の問題に及んだ。或るフランスの名高い医者も出席していた。一婦人がこの医者に向って話をした。この前の戦争の時、夫が遠い戦場で戦死した。私はその時、パリにいたが、丁度その時刻に夫が塹壕で斃れたところを夢に見た。それをとりまいてる数人の兵士の顔まで見た。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫は夫人が見た通りの恰好で、周りを数人の同僚の兵士に取りかこまれて、死んだ事が解った。

ベルグソンは実に簡明にこう考えた。

この光景を夫人が頭の中に勝手に描き出したものと考へることは大変むつかしい。どんな沢山の人の顔を描いた経験を持つ画家も、見たこともないたった一人の人の顔を、想像裡に描き出すことはできない。見知らぬ兵士の顔を夢で見た夫人は、この画家と同じ状況にあったでしょう。そうい

う夢を見たとは、確かに精神感応とよんでもいいような、未だはっきりとは知られない力によって、直接見たに違いない。そう仮定してみる方が、よほど自然だし理にかなっている、と言う考えなのです。

ところが、その話を聞いて、医者はこちら答へたという。昔から身内の者が死んだ時、死んだ知らせを受取ったという人は非常に多い。けれども、その死の知らせが間違っていたという経験をした人もまた非常に多い。つまり沢山の正しくない幻もあるわけです。どうして正しくない幻の方をほっておいて、正しい幻の方だけに気を取られるのか。たまたま偶然に当たった方だけを、どうして取り上げなければならないか、と答えたというのです。ベルグソンはその講演で、こう言っています。一流の学者ほど、学者は自分の厳格な学問の方法を固く信じているから、その方法のとりこになってしまう。その医者は夫人の見た夢の話を、正しいか正しくないか、つまり夫人が夢を見た時、確かに夫は死んだか、それとも、夫は生きていたかという問題に変へてしまうと言うのです。夫人の経験の具体性をそのままに受取らないで、これを果して夫は死んだか、死ななかつたかという抽象的問題に置きかえてしまう、そこに根本的な間違いが行なわれていると言うのです。

経験科学と言う場合の経験は、科学者の経験であって、私達の経験ではない。私達が、生活の上で行なっている広大な経験の領域を、合理的経験だけに絞った。そしてこれを計量というただ一つの点に集中させた狭い道を一と筋に行った。そのことで、近代科学は非常な発達を実現できた。しかし人間精神の動きの微妙さは計量計算には到底ゆだねられない。そこに精神的なものの本質があるといつても、常識にそむくまい。」

ベルグソンが記憶の研究にはいつていった頃、心理学の方でも、意識心理学から無意識心理学への転換が行なはれる機運が来ていた。唯物論の上に立った自然科学の方法だけを頼んで人間の心を扱う道は、どうしてもうまく行かなくなったという事です。大昔の人達は、誰も肉体には依存しない魂の实在を信じていた。これは仮説を立てて信ずるという点で、近代心理学者達と同格であり、何も彼等の考えを軽んずる理由はない。精神より物質を優位に据える仮説では、いろいろ不都合が生ずる事になるなら、精

神は、無意識とも呼ぶ近付き難い、謎めいた精神的原理の上に立つと考へ直してみるのもいい事だ。」と紹介している。

小林は念力などの超自然的現象に対して、今テレビが代表する世の知識人は、事実を事実として素直に受け取ろうとはせず、どこか嘲笑的態度をとるのが一般であり、現代の通念にしたがっていないことはすべて理解できないとして拒否するが、そのような態度は、彼らがどこか根本的な反省を欠いているのだと述べている。

1-2 藤田尚志の論文*2

藤田尚志氏は京大文学部からフランス リールに留学した若手のベルグソン研究者である。現職は九州産業大学の哲学准教授だ。彼はこの講演について次のように論評している。

「この第3論文は、ベルグソンが心霊現象に正面から取り組んだ唯一の論文であるというまさにその事実のゆえに、論文集そのものがマージナルな扱いを受けている。現在ベルグソン研究者のある学者はこれを空理と呼び、彼の一時的な気の迷いか、非合理的な恥部として不問に付すという空気すらある。」といている。

藤田氏は、この論文を書いたベルグソンの意図をこのように解説している。

まずベルグソンは心霊現象を「自然科学の対象と同じ種類のもの」とし、しかしそれは物理現象とは違う精神現象であるから1回1回ごとに特異な形で現れることに注意して、それにあつた研究方法をとらなければならない。精神感応であるテレパシーは、共感と表裏の関係にあるという本質も指摘している。物理現象は主観を挟まないのとの違いである。このように解説しつつ、ベルグソンの最後の大作「二源泉」の終わりの部分を援用して、彼の意図するところを普遍化する。

すなわち

哲学とは思考の習慣的な方向を逆転することである。

哲学は人間の条件を超出するための努力でなければならない。

物欲の大地に縛られた人類の目を、精神性の天空に向ける。

神秘科学 心霊科学によって人類自体を転換させる。

それらのことは、この領域の調査で得られたことを徐々に時間をかけて伝えることによってしかなされない。それが抽象的で力のなかった来世信仰から、生きた実効のある現実に変えていくことができるのだ。と述べている。

ここで紹介した二つの評論はベルクソンの意図を正しく受け止めて、これからの心霊科学の発展を重要なものと述べている。

しかし心霊科学の研究は、彼が期待したようには進まなかった。神を信じる者も信じないものも、また死後のいのちの存続を信じる者も信じないものも、同じ土俵で、その現象に率直に向き合い、研究の方法論から探っていくというあるべき研究体制は、どこにも、そして少なくとも現在までは生まれなかった。

第6章 超心理学研究*3

ベルクソン以降心霊研究は、統合的には進まず、二つの流れに分かれ、お互いが無視する不毛の分裂の空白が生まれたまま展開したのである。

一つの方向は、超常現象あるいは心霊現象は存在することは認めながら、霊界からの作用が介在するとの考えは拒否し、人間の知られざる能力がそれらを起こしているのだと想定し、もっぱら生きた人間がもつ超能力を探ろうとする超心理学である。人間だけが相手だから、科学から外れない追求法さえ厳守すればアカデミズムの領域で生き残れた分野だ。

6-1 超感覚的知覚（ESP）や念力（PK）の調査研究

1876年に実験超心理学研究が英国 SPR の設立とともに組織だって調査研究が行われ始めたことは第1部で述べた。その後研究の展開の主力はアメリカに移る。SPR のアメリカ本部 ASPR が活動を始める。初めは SPR

の活動と同じく、霊媒なる特殊能力者による死後霊との交流に関心があり、その記録の解析が続けられたのであるが、ハーバード大学からノースカロライナのデューク大学に拠点が移った 1927 年から J・B・ライン教授によって ESP 実験心理学が始まった。

その特徴は一切の霊媒を排除して、普通の人間の超能力の発見を数理統計に沿って発見しようとするものである。科学技術がますます世界を支配していった 20 世紀の風潮は、もはや霊媒による死後霊との交流を研究の対象とはできなくなったのである。

ライン教授の実験は、人間が持つかもしれないテレパシー能力を、普通の人間同士の間で発見しようとするものだ。統計処理ができるように簡単なシンボル画を画いた 5 種類のカードが用意される。実験される二人の普通の人の一人がある部屋で任意に選んだカードの絵見て、その絵柄を、離れた別の部屋にいるもう一人に伝えようと念ずる。受け手は伝えられたと思いつつその絵を選ぶ。5 枚あるから偶然なら 20%の確率で当たる筈だ。しかし数多くの実験から成功する確率は数%上回るのだ。その後も疑り深い反論者が絶えないのでこの実験法はどんどん複雑になっていったがどの方法でも、あり得ないと考えられてきたテレパシーは、一般の人たちの間でもわずかながら存在するとの統計的結論が出るのだ。

さらに被験者をランダムでなく、音楽学校の生徒を対象にするとか、芸術的直観的センスの豊かな人間同士にすると、その確率は上昇するという知見も得られたのである。

しかしその伝達内容は統計処理ができるように用意された図形がシンブルなものであり、被験者にしても手当をもらって実験に協力するだけなので、伝達に必死になるようなモチベーションはない。ベルクソンの演説で取り上げられたような死に臨む戦場から留守宅の妻への必死の思いといった元来精神感応のエネルギーが発揮する環境のことは何も配慮されることはなかった。またそれがいかなる媒体によって伝達されるかの仮説が立てられることもなかった。

人間の未知の精神力として、遠隔の物体に対して作用する念力というも

のがあると知られ、それをサイコキネシス（PK）と名付けられた。例のスプーン曲げとか物体移動といったものだ。20 世紀前半までは霊媒者たちは、暗室でテーブルを宙に浮かせたりして、盛んにこの PK を発揮したが、20 世紀になって有力な霊媒を囲むような会が世間の非難の中で行われなくなっただけのためにかげを潜めた。

テレビ時代に入り登場したユリー・ゲラーのスプーン曲げが世界的に有名になった。それに刺激されて、スプーン曲げなら自分でもできるという若者が出てきた。スプーン曲げも不思議な能力であるが、その他にも不思議な PK の類が否定できない能力と認められているが、その本質を究明するところには至っていない。PK 能力者が公開の場の実験に協力的ではないからである。この種の能力発揮は共感の雰囲気の中では可能なのが、疑いの目があれば萎縮してしまうという性格があるからだ。

6-2 深層心理学*4*27*28

人間の精神のエネルギーという観点に、別なアプローチが 20 世紀の前半に生まれ始めた。

ベルクソンは、意識の本質は今を生きるためのものであるため、必要でない記憶や特殊な感覚は意識によって抑え込まれてしまうという本質を先の講演で指摘している。まさにそのことを探索したのがフロイトやユングのいう深層心理学である。ユングはそれを「無意識の領域」の心理としてその解明に力を注いだ。

無意識の記憶は個人が幼い時に体験したものもあるが、さらに個人誕生以前に祖先から受け継いだ記憶がある。それは個人を越えるものであるためユングは「共通無意識」と名付けた。無意識の心理には理解しがたいパワーがあるとみている。彼が「共時性シンクロシティ」と名付けた現象で、さきの PK 現象のように空間を隔てて起こす力を持っているとし、その現象もこの無意識領域の起こす「共時性」の出来事と説明した。しかし名付けただけでそれ以上の解明はないにもかかわらず、名前が付いただけでいろいろとわかったように使われている。たとえば前節で紹介した V・ユゴ

一のテーブルタッピングによる異界との交信もユゴアの深層心理がなせる業であるとし、異界との交流を否定するための説明として使われたりするが、それなれば深層心理がどのように外界に働きかける力となっていくのかの解明はない。

6-3 トランスパーソナル心理学*8*9*10*11

超心理学は、人間にはテレパシーの能力がある程度存在するという成果をあげたに留まってそれ以上は進展しなかった。しかし心理学上の展開は、無意識・深層心理の発見とともに、さらに自己の奥に沈潜していく方向で展開した。

1960年代から70年にかけて、アメリカ西海岸を中心としたニュー・サイエンス運動のなかで、心理学もこれまでの西欧流の分析から東洋思想に見られる超越・統合への視点をもったものへと展開した。「トランスパーソナル心理学」である。自己を越える心理学と訳していいのかもしれない。自己を見直すという点では同じ線上に「人間性心理学」と分類される心理学もその直前にうまれている。これまでの心理学が客観分析を重んじたのに対し、この両者とも人生の「自己実現」といった目的論的学問であって、その達成のための心理探究とその手法の開拓に向かったのだ。そこに親和性のあるインド思想、仏教、特に禅の思想に接近していった。ちょうどニュー・サイエンスの旗頭「タオ自然学」を著したフリッチョフ・カプラがインド思想の中に素粒子運動の類推を見出したように。

トランスパーソナル心理学を理論づけたケン・ウィルバーによってその本質を説明しよう。それは物質から生命そして心へと通っている1本の柱がある。それを「スピリッツ」が推進するとする。進化とは働いているスピリッツだとする。進化には構造がある。進化するすべて実在は、ホロン構造をなす。ホロンとはそれ自体が全体であり同時に何か他の全体の部分であることを特質とする。ホロンはスピリッツにより、常に自己超越をしつつ進化するが、その時は常にその前のものを含む。その仕組みが働くス

ピリッツの核心だとする。

その進化論の上に進化の最上階は意識の変容を伴う神との一致、コスモスとの一体化だとする。この段階にはさらに細かい段階を述べるが、その定義はインド思想用語だ。その高い段階を踏破していくためには默想的修行、瞑想体験を経ていかねばならないとする。我々にはおなじみの禅の世界に入り込むとしか見えない。修行によって究極の段階に達すれば、生も死もないコスモスに溶け込むのだという。だから死は問わないのだ。そして全過程が魂の成長を目指すとの根本理念があるので、その先に転生説が繰り込まれる。シュタイナーの人智学ともつながっていくのだ。

日本でもこのトランスパーソナル心理学は流行している。先に希望を持ってない社会の中で、心の癒しと自己変革をもとめる人たちが増えているから、高価な参加費をとって次々にトランスパーソナル心理学の実践ワークショップが開かれている。心理学とはいえ宗教活動に近い。

トランスパーソナル心理学も、シュタイナーの人智学も、そして禅宗も共通するものは宗教的でありながら、無神論で、人間の修行努力、それも何度も輪廻転生を繰り返して行って覚者になっていくという自力本願、人間至上主義なのである。

第7章 20世紀の新興宗教

心霊研究の流れの今一つは、アカデミズムの世界には見切りをつけて、死後のいのちの存続を前提にして、心霊・神霊世界を信じて探索しようとした分野だ。

7-1 世界スピリチュアリスト連合*5*6*7

第1回の報告でのべたイギリスのスピリチュアリスト連合 SNU は第2次世界大戦後も活動を続けた。この運動の中心には霊媒たちの存在が不可欠であったが、霊媒たちは怪しい存在として迫害され、投獄された。連合は霊媒たちの法律的な保護活動や、霊媒たちのレベルアップのための教育

に力を注いだが、しかし発展はほとんどなかった。

欧米はキリスト教国であるので、スピリチュアリズムはキリスト教に接ぎ木された。1931年霊媒の中に福音伝道中のイエスと会話した聖書学者が霊媒Dモーイスに現れた。彼女を中心にキリスト教スピリチュアリスト連盟が生まれ米英のスピリチュアリズムはそれが中心となった。その信仰宣言はオーウエンの宣言にイエスキリストを主とすると加えただけで基本は同じである。存命中のイエスやその仲間と語り合う霊媒はこのほかにも多くいたのである。これらも宗教団体としては衰退している。

唯一それらと同じ根から生まれたものの中で「エホバの証人」は元気だ。現在われわれが街で熱心に布教活動をする信徒を見かけるが、この信仰団の持つ信条はキリスト教的スピリチュアリストのそれに近い。イエスを三位一体の神としたカトリックの教説を否定し、神エホバとその国から派遣されたイエスを信じる。これは1850年に大ベストセラーとなったスピリチュアリズムの元祖A・J・デイヴィスの「自然の原理」で述べたイエス観とおなじである。「エホバの証人」の最大の特徴は終末思想をもち、世界の崩壊の時、救われる人の召集という危機感を与えて教勢を拡大した。

7-2 日本の20世紀前半の新興宗教*20

第1回の報告でも述べたように日本でも19世紀から20世紀の前半にかけて大本教などの神霊主義の宗教が生まれた。それから多くの分派が生まれたが、戦時体制の強化で国家に抑圧された。

戦後信仰の自由を得て活発になった宗教団体がいくつもあり、今も身近に熱心な信仰者たちがいる。創価学会、世界救世教、大山ねずの命神示教会などである。これらは戦後の復興とそれに続く高度経済成長期に社会の底辺で勢力を拡大した。この時期社会は豊かにはなっていたが、それだけで人は満足しない。かえって真の生きがいはどこにあるのかを探す人も増えそのエネルギーを吸収して教団を伸ばした。

創価学会は人間日蓮を本佛とし、法華経以外は真つ向から否定する。こ

れを国教とし国立戒壇の建設をめざす。先祖供養もしないし靈的なものは一切なかった。(最近一部方向転換があつて、創価学会経営の靈園ができたようだ。) 創価学会の組織で活躍すれば現世の幸福が約束される。800万人を超える信徒組織をもち政治にも深く関与している。

立正佼成会や妙智会も同じ日蓮系の教団だ。創価学会との違いは先祖供養を重んじ、戒名の与え方の改革(夫婦平等)をして仏教に親しんだ人の違和感を減らした特徴をもち創価学会と対抗した。

世界救世教は、岡田 茂吉(1882年-1955年)が創設した。貧困病苦の中、大本教に入信。自らの館山山頂における神秘体験をもとに、全人類の病、貧困からの脱出、新文明世界(=地上天国、理想世界)を創造することを目指した。新文明世界は3つの活動理念「精神性」「美」「自然力」を培い発展させることによって達成されると説いた。自然農法の創始者、美術の支援者としてMOAや箱根美術館などを創設した。この教団の特徴は浄霊と呼んでいる「手かざし」による病の癒しである。国内外約90カ国以上に教勢を広げており、合計100万人以上の外国人信徒が「浄霊」を行っている。分派も多い。(その中には死後の世界を受け入れているのもあるようだ。)

これらには共通した特徴がある。現世的なのだ。死の先を問わない。垂直軸の先は日蓮であったり法華経であったり、岡田茂吉の生き方であったりするが、主眼は信徒のつながりという横軸である。創価学会の組織で人々は生きがいを得た。救世教の浄霊でお互いの健康を願い合った。その実践する人生教訓は健康的で明るい。ただし信者の望みも変化してくるので、先祖供養や死後の世界への配慮をする傾向が出始めている。

7-3 20世紀後半の日本の新宗教

20世紀の後半になると、超越世界からの影響を正面に出した新宗教が始める。

GLA という穏やかな新興宗教がある。オーム真理教や幸福の科学の先輩だ。霊的離脱を経験して魂の輪廻転生と成長を確信した高橋信次とその娘高橋佳子が「魂の学」という素朴な原理で信徒を集めた。自己の確立と世界の調和を説き、世界の危機感をもたないので穏やかな展開ながら信徒を増やしている。

オウム真理教は 20 世紀の最後の落とし子だ。超能力を修行によって得たと称した麻原彰晃が魔神として登場、大学を回って理系技術系でありながら社会では先が約束されない見えない不安の若者に現世での恐ろしいアクティブな活躍の場である日本転覆、改造の夢を与えた。「宗教も科学だ」と語る麻原には超越者は自分しかない。

「幸福の科学」も同じ時期だ。教祖の大川隆法が異界との通信「チャネリング」によって諸宗教の教祖と直接語り合い、自らがエルカンターレなる神と自覚宣言した。彼の指導のもと、仏法真理の探究・学習・伝道によって「この世とあの世を貫く幸福」と地上ユートピアの建設を目指している。右翼的主張をもって政治への参加を目指している。

霊界からの信任をもって教祖の権威とするのだが、教団の中で謙虚さを失い自らを神格化する例が多い。カリスマ一代限りに終わることになるろう。

第 8 章 21 世紀のスピリチュアリズム

8-1 2012 年アセンション騒ぎ*15*16*17*18*19*21

19 世紀に世界を風靡した霊界通信が、20 世紀の終わりのころから新たに復活し始めた。今回の発信元は宇宙時代の知見を反映して宇宙からだ。太陽系だけでなくプレアデス星雲などからの霊界通信がある。

マッシュブック*21 という長く続いている霊界通信がある。17 歳で自動車事故にあった息子からの霊界メッセージが 14 年後から母の耳に聞こえ

始めた。オバマ大統領の選挙を支援し、それを阻止しようとするイルミナティなる金融資本の陰謀を攻撃するなど世界の現状への強い関心がある。彼が述べるところによると、マシューはひとりではなく、一群の地球工作部隊を作って、地球の精神レベルの向上をはかる役割を持っている。それをアセンションとって 2012 年に大きな節目を迎えるといった情報を語った。

この 2012 年アセンション説は他の人々も同調した。

東大物理を出てソニーの半導体に 10 年勤めたという坂本政通はアメリカのモンロー研究所で体外離脱を習得した。ヘミシングという二つの周波数の音源をイヤホンで聞きながら訓練すれば、高次の変性意識状態に入り、体外離脱によって、自分の過去生をしり、5 次元空間の地球外のさまざまな知的生命体とコンタクトし情報を得ることができる。地球外の知的生命体からの情報で、地球は 2012 年大きなアセンションを迎え、天変地異が起き地球はより高い存在へと突入するという。

この 2012 年アセンション説は 2008 年ころ沢山の出版物で紹介された。経営者の船井幸雄、人気作家よしもとばななや、NHK まで「2012 年文明が終焉する」という本を出した。ローレンス・E・ジョセフの著作でインカの暦と宇宙観測などから 2012 年の危機を立証したという。

2011 年は東日本大震災で原発が崩壊した。これをもって予言が当たると信じた人もいたかもしれない。しかし当の 2012 年の冬至は何事もなく穏やかに過ぎていった。

この説を熱心に支持した人に共通することがある。メッセージの発信元が遙かな宇宙であり、死後の輪廻転生や、死後の魂がグループを作って地球に働きかけていることを主張するのだ。

その多くは講座やグループ学習の会を作って熱心に会員を勧誘している。新宗教の現代版といった趣がある。2012 年騒ぎで、それが過ぎた今勢いをうしなったかもしれないが。

8-2 真如苑*20 と本願寺大谷暢順法主 古典仏教に霊的息吹

21世紀になって在来仏教の分野でも目覚めがあった。その一つとして急成長している新興仏教団が真如苑だ。創立は古いが、急成長の原動力は女性で真言宗醍醐寺派の大僧正位をもつ伊藤真聰氏だ。バブル崩壊の直前に父から教団を引きついだ。国際的で華やかな活動パフォーマンスをして教団の勢いを伸ばしているが、教団のホームページを見る限り真言宗そのもので、その飛躍の核心が見えない。しかし宗教学者島田裕己氏の調査によれば、その特徴は霊能者群の個別接心にある。巨大な建物は病院の個室の集まりのようで、ここに霊能者が入り、「接心」を受ける信徒に会う。霊能者は入神して霊言を与える。それはシャーマンのようなおどろおどろしいものでなくカウンセラーのようだ。霊能者も修行さえすれば誰でもなれる。創価学会のような組織仲間の結束といったものはまるでない。個々に霊能者を介して縦につながるだけだ。ここに時代の新宗教たるポイントがあるのだろう。

日本最大の仏教宗派のひとつは浄土真宗だろう。大半は眠り信徒であるうが、それでも本願寺は親鸞の直系の聖人が法灯を継ぐ最大の寺院だ。その25世法主の大谷暢順が1000円本を出した。本の題は「人間は死んでもまた生き続ける」*23 帯広告には「この世限りの命だ」と思っていると損をする」とある。全国紙に1面広告を出したのだから驚く。

内容は古い輪廻転生から説き起こし、釈迦は自らの悟りによって恐ろしい輪廻から抜け出した。しかしそのような悟りは釈迦にしかできない。凡人には到底かなわない。救いは阿弥陀仏だ。阿弥陀仏は釈迦も含めたすべての如来の上に立つオールマイティの仏で、慈悲深い。彼に頼ればその力で極楽浄土にうまれることができる。という親鸞の教えを再び確認しているだけなのだが、それだけならば誰も見向きもしないだろう。この本のインパクトは本来本願寺の法主の次男として生まれた彼が、それゆえに受けた冷遇に反抗して、僧職をいったんは抜け出し、フランスに貧乏学生として留学し、フランス文学に生きようとする。しかしこれにも挫折する中で徐々に浄土真宗に目覚めていく。帰国後京都外大に職を得て、東本願寺の内紛分裂に会い、東山浄苑という納骨堂の理事長職を押し付けられたが、

その間対立する僧侶たちからお前はまだ修業が足りないと監禁されたり、という赤裸々な経験の告白と、心の遍歴の中から、阿弥陀仏浄土というあの世の再発見物語だから説得力があるのだ。新聞広告のキャッチフレーズ「人間は死んでもまた生き続ける」は率直で社会にインパクトを与えたに違いない。

この二つを紹介したが、それは古くてそのままでは 21 世紀の時代には受け入れられない仏教団が、霊界との結びつきを再確認するか、強化することで、時代の要請にこたえ、それが成功している。

第 9 章 臨死体験

立花隆と NHK の共同ドキュメンタリー「臨死体験」は 1991 年に放映され、今やその言葉を知らない人はいない。しかしそれは 20 世紀後半の新しい知見なのだ。19 世紀の終わり心霊現象を科学的に調査研究しようとした英国 SPR は 6 つの分科会を作ったが、テレパシーや催眠術、サイコキネシス、霊界コンタクトなどを取り上げたが、臨死体験の項目は無かった。1946 年の英国映画「天国への階段」(A Matter of Life and Death) は今から見れば臨死体験の物語であるが、当時は奇抜なファンタジーとして受け止められ、それが広範に経験されている深刻な現象とはみられていなかったのである。

1975 年に発表されたキュープラー・ロスの「死の瞬間」*24 は、死に向かう患者のこころのケア—の問題を訴え世界の注目を集めたが、そこには臨死体験は触れられていない。しかしその後、その延長上で彼女自身が体験した臨死体験を発表した。これをきっかけに 1977 年にはアメリカで臨死現象研究会が発足した。21 世紀になって欧米諸国で、広範囲の調査がおこなわれ、それが稀なケースでないことが明らかになった。

臨死体験の内容は民族の特徴や宗教によって異なるが、体外離脱、トンネルを越えて光の世界へ、心の安らぎを経験したといったことが、多く共通している。

臨死体験は、脳が崩壊する時に起きる生理学的な変化が誘発する幻覚だ

と科学信奉者は主張するが、その証言を幻覚と片付けるにはあまりにリアルで迫力があるのだ。

私自身にもこんな経験がある。24歳のころ結核治療で肺葉切除手術をうけた。全身麻酔で3時間の手術だった。終えて自室に戻されて1時間後に麻酔が切れて、激痛と呼吸の苦しさに目覚めて、3日3晩の厳しい時間を過ごした。ずっと後で気が付いた不思議な思い出があるのだ。ふと気が付くと自分はテラスの暖かな日差しの中のガラんとした部屋で横たわっていて、えも言えぬ良い気分だった。宙に浮いて寝ているようだ。近くで女性が床を洗いながらしゃべっているようだった。そのまま、また眠ってしまった。そんな夢だ。

それは夢のようだが夢と違うリアルさがあった。大抵の夢ははかなく忘れるが、その記憶は今も鮮明なのだ。どうやらそれは手術後まだ麻酔は効いていて、身体はまだ物体としての肉体のまま、痛みを感じる脳も寝たままの状態、それらとは別になった魂が、ふと気づいた手術室の出来事で、手術が終わって看護婦さんたちがそばで床清掃していた風景だったとしか考えられないタイミングなのだ。リアルで気持ちがよく、安らかだったという点は、多くの臨死体験と共通している。

第10章 芸術を先頭にした社会的風潮の変化

21世紀になって、最近身近に感じる異変がある。その風潮を感じさせてくれるのは芸術家たちだ。

東日本大震災のあと東北応援ソング『花は咲く』が繰り返し流れた。人の心をつかんだ不思議な歌だった。

真っ白な 雪道に 春風香る 私は懐かしい あの街を思い出す
叶えたい夢もあった 変わりたい自分もいた
いまはただなつかしい あの人を思い出す
誰かの歌が聞こえる 誰かを励ましてる
誰かの笑顔が見える 悲しみの向こう側に

花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に
花は 花は 花は咲く 私は何を残しただろう

この歌は心にしみる。それは明示されなくとも、これが亡くなった人達が、あの世から語りかけ、それにこの世から答えるという応答歌になっているからだ。大勢の人が無念の死を遂げた。そのままでは報われない。その思いを代弁しているのだ。

2015年正月に封切られた「母と暮らせば」は、山田洋次監督が作家・井上ひさしさんの遺志を継いでつくられたものだ。2004年に映画化された「父と暮らせば」が広島で、「母」が長崎での原爆死体験の物語だ。ともに無念の死者が残した家族のことを案じてこの世に現れる。山田監督の「男はつらいよ」48作はじめてたくさんの作品には亡霊は出てこなかった。

死後の世界や、死者との交流を描いた映画作品を調べると、21世に近くなって次々に現れているのだ。米国映画「奇跡の輝き」ロビンウィリアム主演 1998 是枝裕和監督作品「ワンダフルライフ英語名 After Life」が 1999年 浅田次郎の小説「椿山課長の7日間」は 2001年に新聞連載小説で 2006年映画化、三谷幸喜の落ち武者の亡霊が法廷にでる「愉快的金縛り」が 2011年といった具合だ。これらの映画作品は、ホラー映画ではなく、日常的な話題の中で、死後の世界との交流を描いているのである。

今、普通の人たちの多くが、死後の世界の存続を疑わなくなったという背景がなければ、これらの映画が興行的に成功するわけではない。

第11章 結び

ベルクソンが亡くなった後、科学技術の目覚ましい進歩で、人間のすべての悩みは科学が解決してくれると人々は信じるようになった。人は無神論者となり、神は死んだ。その空白を埋めるように IT の技術が入り

込んだ。その IT で武装したお金は、人間のコントロールを受けず、逆に人間を支配する時代となった。お金が魔神となった。

ベルクソンが人間の進化に望みをかけて、そのキーを握ると期待した精神科学は、このような時代のために、進むどころか関心も薄らいでいった。探究の一つは心理学の分野で生き残ったが、科学主義の限界を露呈して、テレパシーなどの隠された能力の発見はなかった。それを求めた心理学的は行き詰まり、精神の内面性の探究、目的論的追求に向かい、東洋のヨガや禅に結びついていった。西欧には新鮮だったが人類全体には新味はなかった。

一方、霊界の探索は、20 世紀に途絶えてしまった。この時代に成長した宗教団の特徴は、世俗的な組織化であり、霊的なものは避けたという珍しい特性を持っている。

21 世紀に近くなって霊界の探索が再開された。19 世紀と違った特徴がある。一つは霊界が宇宙規模となったこと、名もない個人が霊媒であった 19 世紀と違って、霊能者と称する人達の知的レベルが高く、教団の主宰者となり、さらには自らを神と宣言するような目立つ存在であることが特徴だ。残念ながらそのメッセージはこれまでの各種宗教がいったことの寄せ集めでしかない。2000 年前のイエスと比べるとその違いがわかる、イエスも父である神のメッセージを仲介したが、本人は終生「人の子」といい謙虚で、教団も作らなかったし、お布施も受け取らなかった。しかしそのメッセージは人類を感動させる。*22

結論的に言えば、ベルクソンの期待に反して、この 100 年人間の未知の能力も発見されず、霊界の探索も納得できるものは見つからなかった。しかし見つからないというのはその事実がないのではなく、それを解明する能力をいまだ人類は持てないでいるのだと見るのが、正しい問題認識であろう。精神に直接結びつくであろう科学の知見が全く足りないのだ。12 章に詳しく述べるが、重力子、重力波、特に生命重力波の科学は、これからまだおそらく数十年先でないとは出てこないであろう

う。その手段を手にしたとき人間は初めて精神に関する本質にせまることができるだろう。

しかしベルグソンの時代には全く見えてなかった臨死体験の知見は、思いがけず正面からでなく裾の方からの風穴を開けてくれた。それは少なくとも死の先に世界はあるという、かすかな、しかし身近に広まっていく便りをもたらしてくれた。

そのこともあって、21世紀にはいつて、よく見れば、どこか人間のこのころの空気が変わったところが生まれている。その変化の先頭に立つのは理論家でも宗教家でもない芸術家だ。彼らは人が死の先の世界の存在を認めても、けっして恥ずかしくないのだと主張し始めた。

絶対と思いこんでいた科学技術の限界も見え、物神として人を支配するお金も嫌われるようになった今だからこそ、逆説的な人間の大進歩かもしれない。これがマシューのいうアセンションかもしれない。

100年の間見失っていただけであった普遍的な人間の思い「人間は死で終わりではない」という思いを再び人類は手にしつつあるのだ。今度こそはそれを失うことなく、安心して肉体の終わりを迎えたい。きっと、希望を持ってその時を迎えるものには、特別な才能がなくても、つまり誰にでも、その驚くべき世界は門を開くであろう。それがどんな広がりがあるのかを生身の人間にも見えてくるのは、100年後を待たなければならぬのだとしても、いまはそれで十分なのだ。

第12章 魂とは何か、そしてその行方は、—私の総合的仮説—

始めに戻って、いただいたご質問に答え、また「結び」で述べた将来の期待を敷衍する私の総合的仮説モデルをまとめてみたい。

その前にこのモデル構築のために、まず最新の物理学の知見をおさえておきたい。20世紀の半ばまでは究極の知見と考えていた素粒子論が、実は電磁体である素粒子群の知見にとどまっていることがわかった。い

まは仮にグラビトンと名付けられている重力にのみ反応する未知の素粒子は、まだ発見されておらず、発見の手段もない。そのグラビトンと総称される重力子は、例えば電子・陽子・中間子などに対応して細分化される各種の粒子群に展開されるであろうが、それはまだ仮説にもなっていない。宇宙観測で発見されたダークマターはこれらを指すものと考えられるが、この中味が発見されるのは22世紀まで待たなければならないだろう。

私の推論モデルには、その未発見の重力子素粒子群と、それらが発信しかつ受信する微細重力波の存在を予想している。それは電磁的素粒子の究極の知見と比較すれば推論できものだから、全くの架空の推定ではない。

今一つは5次元の世界だ。リサ・ランドール博士は、1999年この現実世界が4次元でありながら5次元の世界が接続しているとの理論を発表した。我々は4次元世界に閉じ込められているが、重力素粒子は5次元の世界で自由に動き回るという理論だ。

このふたつの仮説は、人間の知られざる本質を、特にスピリチュアルな本質を解明する補助線としてどうしても必要なものである。50年100年後には宇宙科学が新たな発展を遂げ、これらを証明すると願っている。

Q1 人間はどこから来たのか、どんな存在なのか、どこに行くのか。

これはベルクソンの哲学をそっくり引用したい。生命の起源は宇宙にある。地球に根をおろしてから生命は、それぞれに枝分かれしつつ、20億年の間、生命原理である創発力エランビタールによってより良い生命へと進化していった。そしてその先端に人間はいる。広大な宇宙には知的生命体が存在することはこの説から十分ありうる。この太陽系の地球という惑星に降り立った生命体の発端が、宇宙から飛来したという証拠をNASAは発見している。

地上で生命はめぐまれた環境で進化し、その先頭に立った人間は初めて精神を持った。精神は肉体から独立できるものとして成長した。そのような精神をいなく人間はさらに進化する。精神上の進化に道が残っている。やがて人間は宇宙のいのちの根源である存在に限りなく近づいていく存在である。そして今はその道半ばにあり、もうすぐその全体が見渡せるところまで来ている。

Q2 人間の精神はどんな構造をしているのか。それはどのように生まれどこへ行くのか。

生命は生命からでないとも生まれえない。この哲理を拡大して精神は精神からでないとも生まれえないとする考えから、古くからの輪廻転生説が最近のバージョンとなって語られている。しかしその空間の飛来と肉体への潜入はどのようにできるのかなどを説明したものは見つからない。やはりそれは無理があると思う。その替わりにたてた私の仮説は次の通りである。

人間は、精神体の萌芽である精神発芽細胞ともいうべきものを持って生まれる。それは両親から受け継ぐのである。いま人間は、DNA という長大な化学分子のラセン構造の遺伝子に過去の肉体情報を凝縮した記録体を両親から受け継ぐことを知っている。それと同じように精神発芽細胞も過去の経験を凝縮した記憶をもっている。仮に XSA と名付けておこう。それは人間がまだ知らない重力子素粒子群がつくる重力分子構造体からなっている。(重力分子といっても重いわけではなく重力波に反応し、電磁波にはほとんど反応しない性質を持っている。人間の知っている素粒子群は、電磁波に鋭く反応し重力波にはほとんど反応しないのと正反対の性質を持っている。)

稀に過去生の記憶をもっている人が出現する。転生の証拠と言って大騒ぎになる。漱石の夢十夜にもそのような夢が登場する。誰でもが自分の深い記憶倉庫に降りることはできないので、万人に顕現することはないが、XSA にはおびただしい先祖の記憶が入っているから、それにアク

セスできる特別な才能の子供がいたら過去生を語ることはありうることだ。

この精神発芽細胞 XSA には DNA とは異なり、単なる記憶装置だけでなく、本能的直観の認識装置も備えている。生まれたばかりの赤ちゃんもお腹がすけば泣けばお乳がもらえると知っている。人間は肉体の成長に伴い XSA をもとにして精神細胞体（仮に SA と名付けておく）が成長してくる。SA にある記憶装置部分には生まれたときに持ってきた過去の凝縮部分に追加して徐々に自分自身の生活に伴う記憶を蓄えていく。

そしてやがて人間が自我を意識できるようになるころから、SA は飛躍的に成長し、徐々に肉体から自由に分離できる能力を持つようになっていく。（普通の人には肉体にいのちある間は分離することはない。いのちあるうちに分離できれば体外離脱という特殊なことになるが、訓練すればできるのかもしれない。）

人間は肉体を持った生物なので、社会で働いて食べ物を得ていかねばならない。そのために人間は複雑な大脳皮質を発達させて、言葉をはじめとするあらゆる知識を学習をすることによって理性的な思考をできるようになり、社会生活を円満に果たせるように肉体的存在をガイドする。その時、精神細胞体 SA は裏役に回る。ベルクソンが指摘するように生活に必要な記憶や感情的な直感はむしろ邪魔なものとして理性が抑え込んでしまい、日常の生活の場にはほとんど顔を出さず、おとなしく記憶の貯蔵場所となっている。が、時に身の危険が及んだ時などでとっさの判断が必要な時に SA は「勘」として支援するような形で働く。また非論理的な感情の飛躍によって創造する芸術の制作の時には見事に働く。

肉体は物質であり、細分していけば化学分子となり、最後はおなじみの素粒子《電子陽子中性子》に行きつくが、この精神細胞体 SA はそれとは基本的に違ったグラビトン系の重力子素粒子群から構成されている。今のところ人間はその存在の検出能力を持っていないので、存在しないと決めつけているだけだ。

しかし科学が愚かにも否定しても、経験的には精神細胞体 SA は立派に存在し活躍している。人間の精神は、肉体とは違って、時間空間を越えて動くが、そのことが精神は肉体とは違う特質を持っていることを証明するものだ。

気功の達人は「気」の力で離れた人をも倒すこともできる。「気」は生体重力波だ。精神細胞体 SA が、重力子素粒子群であり、生体重力波を発信し、受信する独自の機能を持っているからできる技だ。「気」もテレパシーも生体重力波の作用だから、現象的には知られていても、電磁気的手法では検出できないので、今の科学は否定することになる。

重力波と聞くと、最近東大の「かぐら」のような深部地下に巨大な装置を使って、宇宙のビッグバンなどの強大な重力場の揺らぎを捕えようとしているプロジェクトが有名なので、人間には縁遠い巨大スケールの話だと思ってしまう。

重力波を検出するには、このような巨大装置を必要とするのにはわけがある。我々が普段接するすべての物質は、電磁性の「素粒子」から成り立っているが、実はこれらの素粒子は質量を本質として持たないことがわかっている。^{*12} これらの本質は電磁気量とその回転（スピン）にあるのだ。その代表選手は光子だ。光子は光の速度で動き質量はゼロで電磁波だ。電子やクオーク（陽子や中性子の成分）も電荷に比べると不釣り合いに小さい質量しか持っていない。元来これらは質量を必要としない存在で、ひよんな過程でついでに質量を持ってしまった存在なのだ。そのような質量を得意としない物質をつかって、質量が絡む重力波を発生または検出しようとするから、滑稽なほど馬鹿でかい装置が必要となるのだ。実際、東大で行われた初期の重力波実験には 400Kg の鋼鉄の丸棒を毎秒 30 回回転させ、発生する重力波を 10m 以内においた重い共振アンテナで検出する実験が行われた。^{*13}

ところが重力波素粒子群が高度な分子群を作れば、それが揺らぎさえすれば重力波が発生するだろう。精神細胞体 SA は重力系素子からできているから、それらが生体重力波を発信し受信し、また重力波エネルギー

を目的に作用させることはいとも簡単なことだと推定できる。気の流れはこの生体重力波と推定できる。遠隔した場所で起きる不思議な心霊現象のテレパシーや PK サイコキネシスは、この生体重力波を駆使する仕事なのだ。

ユングの「無意識」の深層心理の存在、そこにある「共通無意識」や「元型記憶」「共時性」*27などは、通常時は大脳皮質が支配する表面的心理に覆われてひそんだ存在である精神細胞体 SA の記憶であり、その仕事と分かれば何の不思議もない。

人間は成熟して子孫を持てる準備に入ると、DNA と同じく、この精神細胞体 SA から、元来受け継いだ精神発芽部分の新 XSA を再生して、それを精子卵子に入れ込むのだ。その一部には自分が生んだ新しい記憶分も入り込んでいるかもしれない。過去生の記憶や精神的な遺伝は、怪しげな輪廻転生でなく、立派に両親から受け継ぐのである。

この直観的認識機構と記憶装置を備えた精神細胞体 SA は、肉体の死後肉体から離れて新しいのちの世界へ旅立つのだ。輪廻転生のために戻ったりはしない。ゲーテが「ファウスト」の終幕で描いたように。

Q3 天国はこの地上にあるとイエスはいった。それはどこなのか。

さてその旅立ち先はどこだろうか。イエスは「神の国は見える形では来ない。ここにある あそこにあるといえるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ 17-20) といった。通常の解釈は、おたがいに許し合い愛し合う世界ができれば、地上こそ天国だと言われたのだと思っていたが、実はもっと意味が深いのだ。

20 世紀の後半、素粒子論は究極の存在として「ひもまたは面」の振動体を理論化した。それは 11 次元の存在である。ハーバード大学の終身教

授リサ・ランドールはこの 11 次元の世界のうち 6 次元は縮退して影響はないが、5 次元は残って我々の周りに接続し、5 次元空間としてひろがっていると推論した。しかし我々は時空の 4 次元世界に閉じ込められているが、重力子だけは 5 次元の世界へと自由に飛び出せるとした。^{*14}

つまり我々 3 次元の肉体には許されていないが、重力子素粒子群から成り立っている精神体は、この 5 次元の世界へ飛び立っていくことができるのだ。我々には見えないが、今この世の足もとに 5 次元の世界が接続していて、そこに入る精神体は、一挙にワープして何光年先の世界はむろん、さらには別宇宙にすら自由に動き回れるのだ。

素粒子理論から人間の死後の精神の行方が示唆されたのである。

Q4 これらをわきまえば新人類となるのか。

人間の精神は、死後も新しい命を生きるという確信を持てばベルクソンが言うように新人類となるのだろうか。もう一度彼の言葉を引用しよう。「大部分の人にあって素朴に信じられている死後のいのちについての漠然とした思いが、この精神科学の新たな発見によって人々の確信となりさえすれば、人間は今のような快樂にかじりつくことはないだろう。それは、人間種にふさわしい精神のエネルギーを与え、その時人類は新しい種に飛躍することだろう。」(道徳と宗教の二源泉)

人間種の次なる飛躍があるとして、もしそれが肉体的なことであれば、たとえば身長が 2 m を越えるとか、酸素がなくとも生きて入れるとかいったものであれば、それはそう簡単なことではない。しかし人間種の進化があるとすれば、それは精神的なものであろうと、生物進化学の今西錦司氏も言っていることだ。

また精神の飛躍といっても、例えば記憶能力の飛躍とか、頭の回転の速さといった方向はコンピューターを生み出した人間はそれと競争するのは得策ではないことは知っている。となると進化はこころの豊かさの方向だ。

原始人から始まって、人類は食べることを必死で努力し、ついで衣食

住の安定と豊かさを求めた。そこにいつも同類の人間との間の競争があった。つい最近まではその競争は、殺し合いすらいとわなかったのである。いまは武器に替わってお金はその手段である。この人間同志の争いしか考えない人間は、理性を持つ動物の段階にとどまっている。

人間が、自分もつ精神は、現世の限界をも超え、やがて宇宙をも越えていくすごい存在だと理解すれば、それに最大の価値を置くようになるだろうから、やはりベルクソンが言うように世界は変わる。

今、アメリカでは臨死体験者が団体を作り、自分たちはあの世を見てきたのだから、新人類になったのだと称している。あるいは宇宙から地球を見たものや、その体験を分け与えてもらった者は新人類に近づくと
いう人もいる。

意外にも新人類への飛躍は近いところにあるのかもしれない。

以上

<終わりにあたって 恩師加藤先生への謝辞>

10 数年前、高校の恩師加藤栄一先生から「野口君、ベルクソンを読みたまえ。特に全集の 4 巻と 6 巻を」といわれ、マルクス・エンゲルス以来の哲学に取り組んだ。今回この「精神のエネルギー」でひとまず卒業できた。ベルクソンを学ぶことが、意外にも人生後半に出会ったイエスの同伴者としての哲学的バックアップとなったことがありがたかった。

今回の調査中、思いがけなくも先生からいただいた本に再会した。アメリカ西海岸のニューエイジの旗頭 K・ウイルバーの「空像としての世界」*9 だ。この本を再読中に、先生の懐かしい字で欄外に書き込まれたコメン

トを見つけた。先生はここまで先回りしておられたのだと発見して、頭の下がる思いがした。

先生は晩年のある日「わしゃ、死後の生はあると思うよ。しかし個性は失うかもしれない。」とっておられた。私は当時カトリックの洗礼を受けながら、「永遠のいのち」については、なかなか信じられないでいた。先生は、ここでも先達として、この一言で死後のいのちの継続についての信念をバックアップしてくださった。

ただ唯一「個性は失うかも」だけは勘違いであってほしい。あの豊かな個性を持って先の世に居られ、またお目にかかれることを願っている。

参考文献

- *1 小林秀雄 信ずることと知ること p 187 弥生書房 1991
- *2 藤田尚志 唯心論と心霊論—ベルクソン哲学における催眠・テレパシー・心霊研究 NII-Electronic Library Service
- *3 石川幹人「超常現象」を本気で科学する 新潮社 2014/5/20
- *4 C.G.ユング 個性化とマンダラ みすず書房 1991/9/26
- *5 アーネスト・トンプソン 近代スピリチュアリズム百年史 桑原啓善訳 でくのぼろ出版 2011/2
- *6 浅野和二郎 心霊科学からスピリチュアリズムへ 神霊主義 でくのぼろ出版 2003/1
- *7 浅野和二郎訳 永遠の大地 潮文社 H22/11
- *8 ケン・ウイルバー 万物の歴史 大野純一訳春秋社 1996
- *9 ケン・ウイルバー 空像としての世界 井上忠ほか訳 青土社 1984/4
- *10 西平直 魂のライフサイクル ユング・ウイルバー・シュタイナー 東京大学出版会 1997/7

- *11 トランスパーソナル心理学入門 諸富祥彦 講談社現代新書
- *12 質量はどのように生まれるのか 橋本省二 BLUEBACKS 講談社
2010/4
- *13 時空のさざ波 重力波を求めて 坪野公夫 丸善 1986 (s 61) /6
- *14 ワープする宇宙 五次元時空の謎を解く リサ・ランドール著 向
山信治監訳 塩原通緒訳 NHK出版 2007/6/30
- *15 2012 目覚めよ 地球人よ いよいよ始まった人類大転換の時 坂
本政通著 ハート出版 2008
- *16 光のアカシヤ・フィールド 超スピリチュアル次元の探究 よしも
とばなな×ゲリー・ボネル 徳間書店 2009/7
- *17 あなたが「宇宙のパワー」を手に入れる瞬間—永遠に続く幸せの源
泉 デイパック・チョプラ 大和出版 2007/4
- *18 人類と地球のアセンション だからこれからこう生きよう 船井幸
雄 2006/1 徳間書店
- *19 神の使者 ゲイリー・R・レナード 吉田利子訳 河出書房新社
2007/1
- *20 日本の10大新宗教 島田裕己 幻冬舎新書 2007/11/30
- *21 スザンヌ・ワード著 マッシュブック特別篇 現代社会のスピリチ
ュアルな真相 森田玄 きくちゆみ訳 ナチュラルスピリット 2008/11
- *22 アウグスト・クリ著 人間イエスを科学する エハンデラヴィ訳
サンマーク出版 2006/5
- *23 大谷暢順 人は死んでもまた生き続ける 幻冬舎 2015/12/10
- *24 死ぬ瞬間 E・キュープラー・ロス川口正吉訳 読売新聞社 1971/4
- **25 臨死体験 上・下 立花隆 文春文庫 2000/3
- *26 証言 臨死体験 立花隆 文春文庫 2001/8
- *27 共時性の宇宙観 湯浅泰雄 人文書院 1995/7
- *28 宗教と科学の間・共時性・超心理学・気の科学 湯浅泰雄 名著刊行
会 1993/7